

いのちの停車場

大好きな吉永小百合さんが、初めて医師役を演じる映画が上映されたが、コロナ禍もあり都合がつかず、まずは写真の原作を読んだ。

表紙カバー裏から一東京の救命救急センターで働いていた、62歳の医師・咲和子は、故郷の金沢に戻り「まほろば診療所」で訪問診療医になる。命を送る現場は戸惑う事ばかりだが、老老介護、四肢麻痺のIT社長、小児癌の少女……さまざまな涙や喜びを通して在宅医療を学んでいく。一方、家庭では、脳卒中後疼痛に苦しむ父親から積極的安楽死を強く望まれ……。

主人公の医師・咲和子役が吉永小百合さん。本書を読んでいて、小百合さんの声が聞こえてくるようだった。原作は南杏子さん。南さんの本を初めて読んだ。プロローグ救命救急センターの場面は、臨場感にあふれる医療現場が描かれていた。南さんは出版社勤務を経て、医学部に学士編入し、卒業後、都内の大学病院老年内科などに勤務したという。「医療小説」というジャンルにふさわしい作家である。



小説を紹介しても仕方ないので、この本を読んでとりわけ印象に残ったことを書いておきたい。それは私の母の死についてである。

母は2009年11月24日14時17分に、愛知県の春日井市民病院の病室で亡くなった。93歳であった。40日ほど前に入院して、当初はご飯も食べられたが、だんだんと衰弱して息を引き取った。当時、名古屋に住んでいたのので、朝夕の大学の行き帰りに病院に立ち寄った。母はベッドで眠ることが多かったのので、病室で二人だけの時はできるだけ声をかけて容態を観察した。

本書を読み、母が亡くなるまでのことを思い起こした。亡くなる2週間くらい前から、せん妄という現象が起きる可能性がある。難しい字で「譫妄」と書くが、「妄」は心が迷うこと、「譫」はうわごとのことだ。よく聞き取れなかったが、母はうわごとを繰り返していた。咲和子先生は「……最後の日になると、呼吸のリズムが乱れます。いわば危篤状態です。そして、いつもは使わない顎の筋肉を動かし、口をパクパクとさせてあえぐような呼吸になります。これを下顎呼吸と言います」と説明する。たまたま最後の日の午後、私だけが病室にいた。下顎呼吸する母の近くで、声をかけ続けたが、呼吸が弱くなってきたので先生、看護師を呼んだ。

本書を読んで、救急医療や「在宅医療」だけでなく、母の死をつうじて、人間の死について考えさせられた。コロナ禍で多くの人が犠牲になるなかで、病と死を身近に感じるようになった。老後の生き方についても思いをめぐらせた。

(2021年7月25日)